

水試の

何でも魚ツキング

No.56

こんな漁業、 どうでしょう？

みなさん、新しい漁業には興味しんしんと思えますので、最上丸で調査をしながら「これは商売になるかな。」と考えていることを紹介します。

ベニグリ漁業

聞き慣れない名前ですが、底びき網漁業の人は「あつ、あのケンコが。」と気付かれる人も多いのではないのでしょうか。水深50〜70ヒロのアラ場に多くいる直径4〜5センチの二枚貝です。曳網中、泥を掻いてしまつたときに大量入網します。自家用餌料びき網のような小さな網でも1000〜2000キロ入るときがありますから、庄内沖全体での資源は数千トンにおよぶでしょう。

この貝は市場に揚がるのがほとんどなく、食用にもされていません。泥臭いと思われているからでしょうか。確かに洗つても洗つても水が茶色く濁りますが、これは貝殻が軽石のように柔らかいため、殻同士がこすれて出る濁りです。決して、貝の中心が泥臭いわけではなく、茹でてむき身にし、しぐれ煮にするとかなりいけます。

貝曳きなど、魚類に影響の少ない漁法を用いれば、底びき網休漁期間中にも操業可能でしょう。漁具・漁法や加工・商品化の研究など課題は



ベニグリ(加茂沖 水深55ヒロ)

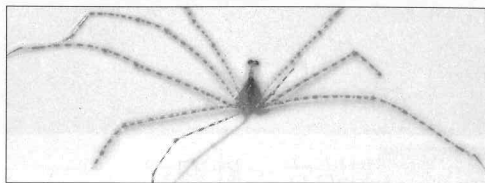
ありますが、魅力たっぷりです。何といつても大量に眠る処女資源ですから。

ミズヒキガニ漁業

漁師さんなら1度は見たことがある足の細い小さなカニです。甲羅の幅は1センチ、足をのばせば20センチ位。漢字で書くと水引蟹。細長い足が進物に結ぶ水引に似ていることからこの名前が付けられました。大変縁起の良い名前ですね。庄内沖ではアラ場を中心に、全体に赤色で足の先だけ白いミズヒキガニと、紅白縞模様のサナダミズヒキガニがよく見られます。

とても華奢なので、網にかかるバラバラになつてしましますが、稚魚調査用の細かい網を使うと2割位は生きています。細長い足でゆつくり歩く姿がとても優雅で、癒される気がします。飼育は容易ですが、高水温には弱いようで、20℃以下に保つ装置が必要です。

ミズヒキガニを鑑賞用に販売している店もあって、その値段はなんと1尾2000円前後！アラ場にはエンコウガニ、コブシガニ、コシオリエビなど、観賞用に売られている甲殻類もたくさんいます。傷つけず、弱らせず獲る漁法の開発、販路の開拓など課題もありますが、ペット漁業として試してみる価値はあると思います。



サナダミズヒキガニ(加茂沖 水深65ヒロ)

寒ダラの雌雄判別

平成17〜19年まで大漁に沸いた寒ダラ。今年と来年はぼちぼちで平成22年から大漁の再来を期待している訳ですが、漁師さんからオスとメスの見分け方について、よく質問されます。「触診」で選別している現在の方法だと、時々間違つてしまいいくもあり、ひどいクレームが来るそうです。しかしながら、外見でオスとメスの区別は付きません。

北海道には尾を持ってぶら下げたときの腹の形で見分ける達人や、かぎ針を刺して判別している方もいるらしいのですが、達人になるのは大変そうだし、かぎ針は衛生上の問題も残ります。そこで思いついたのは内視鏡で腹の中を覗く方法です。

内視鏡は胃カメラなどで使われていますから、「あの苦しいヤツが。」と思つた方も多いでしょう。もちろん、医療用はとも高価ですが、数万円で購入できる工業用も市販されています。直径1センチ以下の製品もあるので、タラに差し込むことは可能ですが、問題は、白子と鱈子の区別がつかぬ。実際に研究してみる必要がありますね。

新規研究課題募集します

現在実施されている最上丸の主な事業は、重要魚種の資源動向を予測する稚魚の調査、底びき網漁業の漁期前調査、大型クラゲ対策調査などですが、これらは平成20年度で一旦終了し、平成21年度からは新たな課題に向けて舵を切ります。みなさまのご要望に応えたいと思いますので、水試職員の誰にでも結構ですから、早めにご意見をお聞かせください。よろしくお願ひします。

水産試験場 阿部 信彦